# 半世紀の歩み

石 居 太 楼\*

## My Life in Java

Taro Ishii

## 解 説

この資料を執筆された石居太楼氏は、知る人ぞ知る、戦前に南方生活体験をした現存日本人の中心的存在のひとりである。82歳の高齢で、いまなおかくしゃくたるものがある。 これまでの人生をほとんどすべて東南アジアとの関係に賭けてこられた、かけがえのない存在である。

石居太楼氏の名前が私どもに注目されるようになったのは、武田重三郎編『ジャガタラ 閑話―― 蘭印時代邦人の足跡』という貴重な文集(非売品)が昭和43年に刊行されたときであった。この木の巻頭に「爪哇邦人草分け物語」というすばらしい長文の記録を書かれたのが目にとまったのが最初のきっかけであった。むろん、それまでにも、戦前インドネシアに在住した人びとで組織している「ジャガタラ友の会」の中核的な人物として大いに活躍されていたのだが、学会で南方関与論が研究されていたわけでもなく、せっかくの人材に注目するひとはほとんどいなかった。

その後、辱知を得、親しくお話をうかがう機会に恵まれるにつれて、石居氏の人生のさまざまな様相がいかに多くの研究課題を示唆しているかに気がつくようになった。なによりも、石居太楼氏の経歴そのものが近代日本の南方関与のひとつの典型であるという私の思いは深まることになった。そこで、この特集号が出る機会にと、無理にお願いしてご自分の来しかたを文章にまとめていただいたのが、この得がたい半生記である。

石居氏は滋賀県長浜の出身で明治29年の生まれ、学歴は敦賀商業学校の卒業、渡南されたのは大正6年であった。つまり石居氏は、まぎれもなく、近代日本の南方関与の第2期、すなわち、「正業」日本人の進出の時期を代表する存在であるといえる。この第2期は、山形県の堤林数衛(明治42年渡南)などに象徴されるように、きびしい日常的規律と経済倫理とに特徴づけられており、日本人の南方進出が社会的妥当性と長期的連続性をもちはじめる時期に相当した。その堤林数衛は厳格なクリスチャンであったが、このような日本人は堤林以前の南洋には進出していなかった。

その点、石居氏が、人生のある段階で、西田天香の一燈園の思想に帰依しているのは注目に値する。堤林のジャワでの生活を神への信仰が支えたように、石居氏のジャワでの生活を支えたのも一燈園の思想であった。石居氏は、新婚早々1週間目に新妻を一燈園での托鉢修業に旅立たせるようなリゴリズムの持ち主であり、そのようなきびしい人生態度に支えられた職業倫理で、大正から昭和にかけての日本人の南方関与のひとつの典型をみずから演じてこられたのである。

とにかく、大正6年にはじまる石居氏の南方生活の歴史は、近代日本の南方関与史そのものでもある。その石居氏が潮谷商会勤務をふり出しに、やがて農村相手の農器具販売の仕事に至るのは意味深長である。日本人として東南アジア社会にもっともうまく接点がもてる局面を、なにげなく探りあてておられる感じである。

<sup>\*</sup> 亚佐弗株式会社

#### 東南アジア研究 16巻1号

ただ、ことにまとめられた石居太楼氏の半生記は貴重な一次資料であるにしても、この手記には、私として不満を覚えるところがないでもない。それは、第2次大戦中、日本軍政下において、石居氏がなにをなさっておられたかが、さほどつまびらかにされていない点である。おそらく、現存のほかの日本人のことをおもんぱかり、筆をおさえねばならない事情があったのであろう。正直に事実を語り尽くすには、あの戦争は、まだあまりにも近い過去なのである。

石居太楼氏の3人のご子息が、みな父親の感化を受けて東南アジアで活躍しておられる 事実は、南方関与の再生産のユニークな事例として、注目に値する。その意味でも、石居 氏の人生は、日本の歴史の上でひとつの契機性をもっているといえよう。この資料をまと めるにあたって、ご子息のひとり石居靖彦氏にお世話になった。改めて感謝の意を表して おきたい。

なお、この資料はいっさい石居氏の書かれた原文のままであり、字句の訂正は加えられていない。(矢野 暢)

### 生い立ち(長浜時代)

私は明治二九年八月九日(一八九六年)滋賀県長浜市元船山三番地の琵琶湖畔の農家にて、 父久次、母つまの次男として生れた。父は吹雪の荒天の日でも休まずに湖畔から藻や泥を採取 して築地し、田地を少しづつ殖やしていったと語り草になるほどの働き者で、私も子供のころ は、父母に連れられて桑畑の草刈や桑摘を手伝ったが、星を仰いで帰る毎日であった。晩年、 兄(久太郎)と共に米穀取引を大口にやり、第一次大戦後の経済パニックにより大きな損失を 蒙ったりして、大正十年二月、五十七才にて狭心症で亡くなった。

兄は、父の死後、遺産を整理して大正十二年に家族と共にジャワに渡り、私の事業に合流し、敗戦までジャワに留り、昭和二十三年、長浜に引揚後、戦時中の軍政下の過度な業務担当と、生活のため衰弱し、五十四才で夭逝した。

母の実家は米原近在の農家で、山林も有し母の弟(田辺亀次郎)は長らく村長を 勤めていた。

弟岩雄は,大坂商大卒業後,母校の敦賀商業の教師となり,その後,名古屋の南山大学に移って,長く教職を勤めた。

こうした親, 兄弟, 伯父など, いづれも私の南方に於ける仕事, 海外貿易に理解を有し物心共に大きな後援, 協力を惜しまなかったことが, 私の人生の大きな支えになった。特に父及び母方の伯父は, 明治中葉の田舎の知識人として, 中央の総合雑誌などを愛読し, 早くから, 日本が将来貿易立国で成り立たざるを得ないことを理解し, 子供達には折りにふれてそのことを力説し, 誰れか一人を貿易業に従事させようと決めていたようであった。

## 学業時代 (敦賀)

私は明治四十三年福井県敦賀商業に入学した。校長は元盛岡士族の大田代順郎氏で,厳格で あったがよく生徒の面倒を見てくれた。

私より三年先輩の近藤鶴吉氏は、明治四十五年卒業と共にスマトラへ渡航し、売薬、行商から事業を始め、このことが、先づ私の南方への目を開くきっかけとなった。同窓生の杉原総太郎君(敦賀町長の長男)などと、当時ボツボツ南方の紹介などが掲載され始めた書籍や雑誌などを熱中して読み、研究することになった。杉原君は、大正三年卒業と同時に、校長の世話で、蘭領東印度貿易では、日本で嚆矢といわれる潮谷商会へ入社し、ジャワ出張を待機することになった。

当時の敦賀は、日露戦争後、ウラジオを経て、シベリヤ鉄道による、日本と欧州を結ぶ交通 要衡となり、ロシア人始め、内外人の往来多く、古い小さい町ながら、国際貿易港として賑っ ていた。敦賀商業もその影響で、中等学校であったが、ロシア語を正科とし、英語には立派な 教師を迎えて、熱心に語学を教えた。敦賀は、私の南洋貿易の出発にあたって、恩師、良友共 に、環境にも恵まれていた。

#### 明治末年頃の海外渡航事情

日露戦争によって、当時世界の最強国と言われたロシアに対する日本の勝利は、長年欧米の植民地下に喘えいでいたアジア民族に大きな衝撃を与えた。日本の名声がこれらの諸国に高まるにつれ、欧米の先進国は初めて、日本に対して、危惧、警介の念を抱くに至った。米国が移民制限法を発布し、濠州がアジア人に対して白濠主義をもってし、実質的な移民禁止の措置を取ったのはこの頃である。南米への移民は未だ緒につかず、日本人の海外移民の門戸は全く閉ざされていた。フィリッピン、インドシナ、ビルマ、インド、マラヤ等の植民地は、労働力も有り余るので、勿論のこと移民は困難であったが、貿易に対しても日本製品については輸入制限などの障害があった。

こうした状況の中で、唯一の例外が蘭領東印度で、日本品の輸入も容易で、且つまた日本との間に通商航海条約もあり、日本人は、欧州人扱いで、永住権を交付され、営業も自由という好条件であった。それは、徳川時代を通じて、三百年以上も続いた日蘭関係が相互の理解と、明治中葉より渡来の日本人の唐ゆきさんや行商の青年により、友好的な感情をはぐくんでいたことが原因と思われる。

一方,日本は日露戦争前後の経済不況と,人口増加に伴う食糧不足に悩み,失業率も高く,社会不安が悪化しつつあった時代であり,重労働の人夫としての,ニューカレドニアのニッケル鉱山や,フィリッピンの道路工事などの募集に希望者が多く,続々と刈り出されていった。

蘭印に渡った人々は、初めのころ、写真屋、床屋、時計や機械修理業などの、手先の器用さをかわれた技能者が多く、そのうち、行商より始める商業移民の渡航が始まった。しかし、当時の人々は、ジャワ、スマトラ、ボルネオと聞けば、未開の地であり、ジャングルの中で野蛮人の住む所という位の知識しかなく、よほどの決意ある者か、あるいは深い連絡関係がなけれ

ば行く気になる者はなく、渡航者の数は微々たるものであった。たまたまお国帰りの唐ゆきさ んのお土産話や, 行商青年の国許への手紙の便りなどを当時の人々は唯一の情報源としていた ものである。南洋は、本来平和な熱帯圏であり、生活は簡単であり、中国の政争から追われて 来た華僑にしても、インドネシア人共々温良であった。日露戦争後になって徒に大言壮語する 右翼壮士風の人々(俗に満州ゴロ、支那浪人と言われた)も一時渡航して来たが、現地の人々 は元より在留日本人よりも相手にされず、長続きはせず帰って行った。この点、満州、中国と は異なった発展過程と環境を保つ事ができた。何故に、蘭印で邦人の生業、在留が、現地の人 人に歓迎され受け入れられたのであろうか。それは、明治末年頃渡来の日本人草分時代の人々 が、か弱い女性や(唐ゆきさん)、日本の中等教育を受けた青年達が多く、日露戦争後の経済 大不況と、食糧不足にて、女性は人身売買され、男性は就職難に悩まされたりした 苦 労 人 で あったからだ。徒に内地にて職場争いをするよりも、心ある青年は海外にて活動の新天地をさ がし求めつつあった。蘭領東印度は唯一の開放された門であった。「人間到る処青山あり、骨 を埋むる処異郷とせん」との決心と,一人でも日本の食い扶持を減少せんとの海外発展の信念 で、裸一貫で渡航した人が多い。中には技能を研習し身につけて出発した。蘭印に限って言え ば渡航者の中に、日本の青年を代表するというような、自重心、責任感が多分にあった。一軒 の小さなトコ・ジャパンを開く迄の所定めぬ行商の辛苦にも耐え、しかも現地の人々に対して は、郷に入っては郷に従えで、お客様第一にて、当時のインドネシア人に対して も、トワン (旦那さま)ニョニヤ(奥さま)の敬称を用いたのは一般の驚きであった。商売のかけひきを せず正札主義で老幼でも同じ値段で販売した。この素人商法は日本式として信頼された。海外 で仕事をなし、生活をする要素たる磨擦を起さない、資本や政治的権力の持合せのない、即ち 庶民的、平和的進出であったことが原因ではなかろうか。

この行商は元より困苦欠亡に耐える精神力がないと到底続かなかった。これら二十前後の書生の如き青年は、ようやく辿りついた上陸地のジャワで到着の翌日よりまだ原地語も解せぬまま、手まね、口まねで各家を訪問、行商に突入して行った。初めは両手や肩に持てるだけの品物、売薬を持ち歩いた。行商行程を経てようやく一本の商品陳列棚と一列並びの商品を入れるだけの資本の蓄積ができると、小さな店先を借りて始めたのが、トコ・ジャパンの黎明である。

## 潮谷商会時代(東京)

大正二年頃の実業の日本誌に、ジャワの売薬王として、小川利八郎氏の立志伝が掲載された。学窓中の私達、海外渡航を志す者にとって、この記事は多大な感動を与えた。卒業間近となり、父は大学へ進学することを勧めてくれたが、私はすでに、学校時代より、蘭印渡航の意志を固めて居り、卒業後は一日も早く、たとえ売薬の行商からといえども、渡航実現に意気燃

えていたので、この上、大学生活に幾年かを割く、時間的余裕はなかった。大正三年卒業でろ、新聞で、ジャワ、スマラン市の横山洋行の、行商人募集広告を見るや、早速上京し、而接の上、正式に契約する寸前、前記の同志、杉原君と相談したところ、同君はすでに潮谷商会に入社していて、同社は現地に支店も有り、情報も多く、すでにジャワは行商時代を終って、一戸を構えるトコ・ジャパン時代となっていて、今さら行商でもあるまいと注告された。潮谷商会の幹部も又、日本にて、商店経営の基礎を学んで後渡航すべきであると勧めてくれ、その準備のため入社許可しても良いとの話であった。

私も、この話を聞き、日本にて、貿易や、経済の実情を実習しておくのも、ひとつの大きな経験になるものと考え、ようやく、潮谷商会に入れてもらうことを決心するに至った。この潮谷商会は、現在の蝶谷シャツ(株)の前身で、明治三四年に、日本人で初めて貿易商としての支店をスラバヤ市に開設し、南洋貿易の草分けというべき会社であった。日本人の行商人や、トコ・ジャパンに対して、輸入問屋の役目をし、当時日本品といえば悪かろう、安かろう、と粗悪の代名詞であった時代に、当時の日本が誇る最高級品を扱うことで有名であった。この時の取扱い品で、現在尚、日本で一流品として通用しているものも数多い。すなわち、蝶谷印シャツ、佐々木硝子、松崎のカバン、名古屋の陶磁器、その他、繊維製品、玩具、洋品雑貨などであった。

私が、この会社の東京本社にて二ケ年半の間、ほとんど小僧奉公に等しい勉強時代を過した ことは、その後決して無駄にはならなかった。大正五年、徴兵検査を受けたが、軍縮時代でわ ずかの近眼とかにて兵役免除となった。

潮谷商会は日本橋橋町四丁目にあり、近所に三ツ輪石鹼の本社があり、共に黒い土蔵造りの店構えで、大正の初期には、新入社員はお仕着せの和服で、便所掃除より、夜番、自転車、大八車を引いての集荷、配達などの下働きを経て、一年後、ようやく、詰襟の洋服を支給されて、一人前の社員扱いとなった。その後、帖面付、貿易の手ほどきを受け、一通りのみこんだ後、大正六年一月、入社後、二年半の実習を終えて、私はスラバヤ支店へ赴任を許可された。当時、第一次欧州戦争の最中で、未曽有の好景気の時代で、南洋では、欧州品が在庫拂底し、日本商品がその代用品となって飛ぶように売れていった。日本人はこの機を逃がさず、欧米品の改造につとめ、一つづつ、欧米品に比して遜色ないものを研究、開発して、これらの新市場へなだれの如く進出していった。この時期が、日本の貿易主義が世界へ向けて飛び出すための最初の好機であり、又、第一歩でもあった。

## 蘭領東印度時代

大正六年正月早々,私は会社より,ジャワ支店詰を命ぜられて,南洋郵船所属の旅順丸にて,神戸港より出帆した。年来の念願叶って,私は勇躍していた。満二十一才の年であり,現

在でいうやっと成人式を迎えたばかりの年令であった。父や兄達も田舎より見送りに来てくれて、当時としては、生きては会えぬかもしれない気持すらするほどの、長旅の出発であった。 船は、バタビヤ、スマランと寄港し、スラバヤまで一ケ月の日程を要した。

ジャワ島は、ゴム、砂糖を初めとして、諸物産の輸出で景気よく、潮谷商会のジャワ三支店 (バタビヤ、スラバヤ、スマラン) は第一次大戦終結の大正八年ごろまでは、正に黄金時代であった。この戦争中に初めて日本品に接した人々は多かった。最初のうち、人々は輸入が途絶えた欧米品の代用として、しぶしぶながら日本品を買っていた。使っているうちに、安もので、すぐに使用にたえなくなるもの以外に、十分、欧米品と対抗できる商品が生産されていることに人々は気付き、改めて、日本と日本人を見直すことになった。私達は、ジャワを始め、スマトラ、ボルネオまで注文を取るために歩きまわった。日本よりの仕入れ品の到着を待っていたのでは間に合わず、よくシンガポールの問屋にまで仕入れに出かけた。インドネシア人を始め、華僑も、こうした日本人の活動には好意的であり、積極的に各地のトコ・ジャパンでの買物を楽しむようになっていた。そこには、同じアジア人が生産したものを購入するという共同意識と、オランダ人と対等に付き合っている日本人とともに、アジア人としての誇りをともに分ち合うといった、極めて素朴な感情が両者の間に存在していた。

当時,進出していた日本商社といえば,三井物産だけであったが,この戦争のため,新しく,商社的に進出して来た鈴木商店(神戸),久原商事,阿部幸(砂糖),東印度貿易など,主に砂糖,繊維関係の会社が支店を設置し、日本人の往来も、目をみはるほどひんぱんになった。この時代に、南洋に物質買付け、売込みなどで渡航してきた、各商社の若者たちの中に、後年、日本の経済界に重きをおく人物に成長したものが多いのは、日本にとっては、新しい、唯一の第二次加工品の輸出先として登場してきた南洋市場を、最重要に考えていたので、各社とも優秀な人材を選りすぐって派遣したためである。

ところが、第一次大戦の終戦後、大正八年ごろより、世界経済の機慌(パニック)が起り、 過度なデフレによって、諸物価が半値以下にまで下るという有様になった。このため、せっか くにぎやかになった南洋も、火の消えたようで、日本商社は、三井を除いて、殆んど閉鎖のや むなきに至った。ジャワで格式を誇っていた老舗の潮谷商会も、整理することになり、私は、 大正九年十月、四ケ年ぶりに日本へ帰国した。日本では、ジャワ以上の不景気で、失業者が増 大し、社会不安一歩手前であった。半年後に、私は旧潮谷商会の整理委員に任ぜられてジャワ に帰った。

この半年間の帯在中、日本内地の世和を見聞し、好況後の惚慌、会社の倒産や社員の失業、 その家族が路頭に迷う姿などを身近かに感じ、私は商業人として内省するところ多く、日夜自 分の生き方に対して悶々としていた。当時発刊された、一燈園の西田天香さんの「懺悔の生活」を読んで深く感銘するところがあった。天香さんは偶然にも郷里を同じくし、長男の保太 郎氏は、私の小学校の一、二年先輩でもあり旧知の仲でもあった。私は、天香さんの説かれる生活こそが、特に経済、産業人として将来生きんとする者の手本とすべきであると深く信じた。この懺悔の生活は、天香さん自身の体験よりにじみ出てきた人生哲学であり、営利あれど社会に還元し、物心とも預りものとし、利益を目的とせず、社会を益する仕事のみを良き仕事とし、この良き仕事に奉仕しておれば自然と社会の中で生かされていくのだ、などという教えを、私は学んだ。経済人は信用を第一にする。物は大切にするが執着があってはいけない。有無を超越して、有を有効的に治生産業に役立たすべきで、私物視してはいけない。これらの言葉が以後の生活に於いて、私のモットーとなった。天香さんは私に書を与え、励げまして下さった。その書は今でも大事にしているが、こう書いてあった。「商事是又報思之行」私は、父母を始めとする、私の回りの人々の恩に報いるという気持で仕事を続けていこうと決心した。

人間一生の間には、特に経済人は利害得失、栄枯盛衰は当然である。一燈園が発行する「光」 誌は創刊以来読んでいるが、奉仕や、財物の持ち方、仕事の仕方などなかなか実践はむつかし い。

こういう信念を持ってなら、再びジャワに於いて経済人として立っていきたいと、大正十年七月、旧潮谷商会の整理を銀行筋の委嘱を受けてやりながら、将来の自分の事業と、そのあり方について日夜検討をおこたらなかった。旧潮谷の整理が正式に発表されるや、蘭印にある沢山の得意先の店主は、行商時代から、トコ・ジャパンへと発展してきたジャワ日本小売商の恩人としての潮谷商会を忘れずに、期日前の勘定まで持参してくれる方が多く、100 %売掛金は回収された。また在庫商品も好値で買手あり、短期間のうちに好成績で清算終了したので、債権者の銀行筋では驚いていたようだった。

在庫品を大部分まとめて買ってくれた有力華僑は、私達のように販売経験あり、得意先も数 多い者の協力を必要とし、トコ・ジャパンの人達も私達に新しい組織で事業を継続することを 希望されていた。友人の一人は、スマトラの避地にて営々として貯めた大金を融資 して くれた。銀行筋でも旧潮谷の事業を惜しんでくれ、融資援助を約束してくれた。その上、日本内地の製造家の方でも勿論、このような不況の中で、旧潮谷の事業の復活を切望されていた。

あちこちより寄せられる応援,助勢の厚意にむくいるために,その担当者は余程確りせねばならない。将来の発展とか,日本の貿易全体の問題とか,現地の購買者に対する責任とかを考え,私は,今回の事業形態を社団法人的な組織にして,役員始め,社員いづれも適当な給与を報酬として分ち,余剰利益は,社会,或いは会社の積立金として,私利のため分配せず,事業に専心する。これらのことを誓い合った同志三人と共に,合資会社潮谷洋行は大正十年六月に発足した。早速,一度処分した在庫品を買い戻し,幹部始め,新しく内地より若い社員を招致し,再興に全力をついやした結果,大正の末年ごろには事業も拡張し,成功を収めた。しかし,

利益が多くなるにつれて、この分配の件でとかく問題が起り、私の理想と相容れない よう に なった。私は昭和三年よりバタビヤに移り,事実上分離せざるを得なくなり,引退 を 決 意 し た。私はシンガポールの亀井平一の長女八重子 (二十一才) と結婚した。私は三十三才であり, 当時としては晩婚であった。これは将来の伴侶たる妻に対し、注文があったのにも原因してい る。結婚を機に従来のはっきりしない会社を退任して、一燈園の托鉢者の気持でバタビヤ日本 人会の書記という、全く変った仕事に入っていった。日本人会は会員も多くなり、会の運営は 元より,子弟の教育のための在外小学校の設立等,多事であった。又,財政的にも十分ではな く,副会長をも兼ねていた私は,当分の間,在留邦人のために,この日本人会の仕事に専念し ようと思った。世間では余りの変りように驚かれるむきもあったが、私は、退社の理由につい ても,敢えて他に説明しようとは思わなかった。結婚した妻は,幼い時からシンガポール育ち で、内地を余り知らないとの理由の他に、一燈園生活をしてもらうべく、京都山科 の 一 燈 園 に、托鉢修業を目的として、新婚早々、一週間目に旅立たせた。私はその後の三カ年間、従来 の経済人生活を逸脱した境地で暮した。運動、娯楽、子弟教育、葬祭など、世話するのが仕事 で、楽しい毎日であった。日本人会に生活協同組合ともいうべき日本食料品、及び野菜を加え た,生活用品を直売する便宜社を創立し,これを経営した。この便宜社は昭和八年九月一燈園 より松原博人さんに托鉢として来てもらい引続き経営された。昭和三年十月には、シンガポー ルより, 妻八重子の父, 亀井光雪(平一)を招いて, ジャワ俳句会の先駆としてジャガトラ吟 社という,俳句会を創立した。シンガポール,マラヤ在留の南方俳句の先輩と提携し,インド ネシアの自然風土に親しむことになった。さらに、昭和五年にはジャワ三都野球大会復活など という, 運動部門に於ける邦人同士の懇親には特に力を入れた。異郷の在留青年の体育と, 精 神的な楽しみであった。

東京の旧友、杉原君のところで帰国前の三カ月間、当時発明された萩原式手編器 を 習得 して、妻がジャワに帰ってきたのは、昭和五年八月のことであった。昭和六年六月には長男日出雄が生れた。

日本人会の世話も一段落し、私も、新しい仕事に再び意欲を燃やし始めた。ジャワに於ける十余年の仕事は、潮谷洋行の仲間と離れてやっても、業種、取り扱い品共に、殆んど同じで、昔の仲間と競合したり、他の輸入小売商の足を引っ張ったりすることも私は望まなかった。ジャワでは日本品はすでに紹介されすぎている。考えた結果、新しい日本商品開拓の地として、アフリカ市場の研究を始めることにした。即ち、東アフリカのケニア、ウガンダ、タンガニィカ方面にジャワ式のトコ・ジャパンを創設することであった。私の理想とする事業方針で始めることにし、同志は、兄(久太郎)に協力を求め、杉原兄弟を加えて、共鳴者は英語の勉強を開始した。

私は長男が生れて四十日目位に、アフリカ、印度、ビルマなどの将来日本貿易の新開地とな

るべき場所の調査,研究の旅に出発した。未だに裸の人が多い,東アフリカのモンパサ港に上陸し,ケニアのナイロビやナイル川の水源地ビクトリア湖のあるウガンダ,ザンジバル,ダルエルサレムなど視察,モンパサを拠点にして,日本人によるアフリカ市場開拓の計画を作り,印度,ビルマを経て,昭和六年九月十八日,シンガポールよりバタビヤ向け出発の日は,計らずも満州事変勃発の日であった。

アフリカ旅行出発前に, 新しい組織, 合名会社日本商会を設立し, 私が代表社員になってい た。アフリカ旅行後直ちに、調査結果を報告の上、日本内地に於ける準備と、新事業開設に伴 う精神の鍛練のための,一燈園での托鉢生活での実践を目的として,一時日本へ帰国した。日 本は始った中国との戦争に明け暮れ、国中が騒然としていた。日本の輸出産業は国際的に不評 を買い、南方各地でも華僑の日貨排斥運動が盛んになってきたのも、大問題となっていた。取 引の長い製造家や、後援者は、こういう時勢であるから、当分の間、新市場のアフリカへの移 転は延期して,蘭印で活動するようにと忠告してくれ,実際問題として,世界の情勢は,アフ リカでの日本人の活動を許さないほど逼迫していた。このような状況のもとでは止むを得ず、 アフリカへのパイオニアたらんとした希望を押えてジャワへ帰ることにした。しかし、従来日 本人商社の扱っている繊維雑貨には手をつけない全く新規商品の紹介で、会社そのものも新し い理想的方針の経営を基本とした。未だ紹介されていない商品ということで結局,人力,蓄力 用脱穀, 籾すり, 農機具とポンプ位であった。ポンプは先づ家庭用人力のもので, 打込井戸作 業も日本で修得した。他に、社員各人の妻の仕事として萩原式手編器の教援と器具材料の販売 を主としてやる事になり、同志達もこの新しい組織で、仕事を始めることになった。この日本 商会は昭和二十年八月大東亜戦争終了まで続いた。戦時中は勿論,軍政でジャワの農村計画全 般を担当し、農機具現地生産を引き受け東奔西走した。

日本商会の取扱い商品,及び仕事の内容は従来の主として日本人相手の商売と違って,全て 現地人相手の仕事であった。バタビヤ,スラバヤ,スマランと,三都市にサービス・ステーションを設営し,開業したが,軌道に乗るまでは相当の努力と苦心を要した。

打込ポンプは,熱帯の住民が水浴と洗濯に日常不可欠のものであり,水道設備の不十分な土地では豊富な水を供給出来,又,高い水道料金に悩んでいる人々は競って,この安値のポンプ設置を希望したので,ジャワ各都市の水道料の収入が減少をきたしたと騒がれる程,普及していった。今だにジャカルタの裏町で,日本商会の刻印のあるポンプが,四十年以上の雨,風に耐えて稼動しているのを見るのはうれしいことである。

人力用から始めた脱穀, 籾すり機は, 農民が青田売買で苦しんでいるのを緩和 する 効果があった。自ら収穫したものを, 玄米, 精白と加工することができ, これが農村の収入を増すこととなり, 各地の農民から大歓迎された。これらの機械の紹介, サービスには農村深く入っていくことが必要で, 農民と寝食を共にして, 堆肥の造り方, 稲作や, 農産物の改良, 増産につ

いて夜を徹して話し合うこともあった。米の増産については、日本式の正条植をジャワ各地で 勧め、やがては、ジャワから、全インドネシアの水田に行き渡るきっかけとなった。

植民地下に喘えぐ零細農民の純真さを知り彼等との交りを深めるにつれ、楽しみと共に 彼等の置かれた状況に同情することしきりで、そのことが、当時よりさかんになりつつあった地下独立運動の志士達との付き合いの始まりとなった。それは、後年、オランダの官憲の目を盗んで、ハッサン、ジョヨカルト氏を日本へ密出国させるなどの行動にまで発展し、バンドンの町田大作氏らと共同して、インドネシア独立運動に於ける、ささやかな協力者として、出来得る限りの工作と援助を惜しまなかった。スカルノ、ハッタ氏などは一九三十年前後より、すでに抑留されていたが、スバルジョ、マラミス、ブンタラン、タムリン、ラオ兄弟などとの接觸があった。現在、インドネシア独立の英雄となった人々の若き、はつらつとしたころの姿を、今でも懐しく思い出すことがある。

大東亜戦争までは、日本の機械類は、ほとんど南方へは輸出などされていないのが現状で、 欧米品との競合もはげしく、日本製と聞くと、玩具のようだと嘲笑されたり、銀行なども在庫 品は屑鉄(スクラップ)の価値しかないなどと融資を拒否されたり、あらゆる苦難があった。 しかし、売込先のインドネシアの農民の喜びの顔や、私達に対する温い気持が大きな慰めで あった。

女性の仕事である,手芸,手編器の指導販売の方は,オランダ,華僑,インドネシアの上流 家庭の婦人に先づむかえられ,日本の婦人と国際的親睦交流ともなった。その後,各都市の中 流家庭婦人の内職用として利用されだされるや,爆発的なブームを呼び,大流行となった。売 上げ収益は本業の農機具の実演サービス費用を十分賄ってくれた。当時のトコ・ジャパンの中 では珍しい生き方であり,日本人からも好意的に見られた。収益の半分は当初の予定通り,日 本人会の教育資金などに寄附していた。この手編器は,その後,次々と現地に輸入され,蘭印 全体では幾百万台も現地の人々に利用され,家内工業の基礎を作る結果となった。

日本は満州事変以来,軍事行動は日支事変にまで拡大を続けて,国際世論も日本に対しては 侵略者として不評であった。こういう時にこそ私は思い当り,収益の中からプールしていた余 剰積立金を利用して,一燈園の天香さんをジャワに招待することを計画した。昭和十二年五月 より六月までの一ケ月半,天香さん並びに,同人八人は,バタビヤを振出しに,バンドンを経 て,中部ジャワ,スラバヤを回り,バリ島に至るまで,巡錫していただいた。ジャワ全島の各 地のトコ・ジャパンを訪れ,公園,オランダ共同墓地の掃除,托鉢に加えて,内外人に対する 講演巡回が目的であった。オランダ人も,天香さんの隣人愛精神や奉仕の生活に共鳴する人が 多く,インドネシア人から暖かい目でむかえられた。第一次日蘭会商後の,制限きびしくなっ た日本人社会に対しては,民族融和,共存共栄,奉仕の気持で仕事も生活もするようにと,熱 心に説いて歩き,天香さんは腎臓病にてむくんだ体に汗を流して,巡錫され,すっかり全快, 身も軽快になった、と喜ばれた。この様子は、日本からの一大哲学者の来印ということで、日本語新聞は勿論のこと、オランダ及び華僑の新聞にも毎日のように取り上げられて、人々に深い感銘を与えた。国際感情は殊に日本に対して悪化していたが、その後四年足らずのうちに全面的に、大東亜戦争に突入することになろうとは、予測する者は少なかった。

昭和十五年八月より始まった第二次日蘭会商は、日本の戦略的な石油獲得交渉であったが、すでに、仏印進駐を機に結成された ABCD ラインに包囲されて、在外資産凍結の動きもある中で、なかなかうまくはかどらなかった。翌、十六年に入ると、在留邦人は、事業はおろか、生活すら困難になり、婦女子を先にして、引揚船による撤退に追いこまれるようになった。トコ・ジャパンの多くの日本人店主たちは、青年時代から営々きづきあげてきた汗と脂の結晶たる店舗や、在庫品を二束三文に買いたたかれて処分し、引揚げていった。日本人会の役員として、引揚者の世話役を任されていた私は、そのまま残り、十二月八日の戦争突入と同時に、オランダ側につかまり、続いて濠州に抑留されることになった。その時点の全財産、即ち銀行預金、在庫品、家財道具など全て、没収され、一夜にして、無一文になった。

これで、旧潮谷商会の破産に始まって、潮谷洋行からの引退、今回の没収と、財産の喪失を 幾度も経験し、元の木阿弥となった。

濠州での抑留生活は長期を覚悟はしていたが、交換船にて、一カ年たらずの砂漠のテント生活から解放され、昭和十七年十月には、直接ジャワへ帰ることを許可された。日本はインドネシアの独立解放、民族自決のための聖戦なりと詔勅にもあったが、遂に終戦まで、独立の約束は果さず、敗戦となった。信頼を裏ぎったのみならず、日本人は終戦と共に先を競って日本へ帰国していった。これでは、日本は、資源と国益のために、あえて独立解放の羊頭を掲げて他国に侵入し、狗肉すら与えなかったと思われるのである。戦時中に幾十万も海を渡ってこの地に来た、軍人、軍属、邦人の内で、いったい幾人の人が、真にインドネシアの人々に約束した、日本天皇自身の言葉を考えたことがあったであろうか。そのことを考えると、戦時中に見られた一部の日本人の行動は、深く反省せねばならない。

私は終戦後は、一般邦人の残務処理を委嘱され、主として、引揚者の世話などをした。約二 カ年間残留して、戦犯者の差入れなども積極的に行なっていた。この仕事は、昭和二二年五月 に最後の引揚船にて帰国するまで続いた。最初のうち、私達のように在留長い邦人の現地残留 を原則的に認めていた連合軍は、オランダによる植民地奪回の動きが始まるやいなや、日本人 の存在に神経をとがらすオランダ人の意を受けて、強制送還を要求してきたのである。私は大 正六年一月、初めて南洋へ渡航して以来、三十年振りに、二十才で出発した時と同様、裸一貫 にて故国へ戻ってきたのだ。 私の留守中、五人の幼い子供を抱えて、妻は毎夜ミシンの内職にて、ようやく生計を立てていた。帰国早々、外務省と厚生省復員局へ行き、ジャワ邦人の終戦処理報告をなし、約半ケ年間、外務省の北沢寮にて、小津さちを氏と同居し、行方不明者、及び独立革命戦争に於ける犠牲者の処理をしたり、戦犯裁判の通訳要員の手配などをして暮した。

帰国半年後の昭和二二年十月には、佐藤信英氏、中谷義男氏、玉井寅次氏と共に、東印度貿易協会を創立した。当時のインドネシアは、独立戦争の最中で、正式にオランダより解放された一九五十年一月まで、相互に無益な犠牲を拂うことになった。この協会は、将来の日・イ両国の経済協会と親善の目的として設立されたもので、未だ国交の回復されなかった当時としては、貴重な連絡、情報機関として意義ある働きをした。その後、財団法人、日本インドネシア協会と名を変え、昭和三十年まで、私は専務理事の任に当った。

日本へ帰った私は、特に収入源もなく、換金すべき私物といっても、元来物質に縁のない生活に徹底していたので、生活には困った。しかも、戦前の存留者や、戦事中の犠牲者に対する援護は何もなかった。蘭印引揚者は、昭和十六年の戦争突入前との理由で引揚給付金の対象からもはずされていた。この不合理に対して、他の同志と共に議会に陳情したり、あちこちに奔走した。議員の中にも床次さんの如き、よき理解者を得て、ようやく、一般邦人であっても渡航途中遭難者、現地での犠牲者(インドネシアの獨立戦争中も含めて)遺族援護法の適用を実現した。電車賃にも事欠く時代ながら、よくそんな世話をする時間と費用があったものと不思議に思うほどであった。私達のように生き残ったものの勤めと思ってやったのに過ぎない。

昭和二四年になって、戦前の旧潮谷時代の先輩や、知人などから厚意により資金の貸与を受けて、現在の墨田区緑町にバラックによる工場兼、住宅を建て、プラスチックの成型業を始めた。妻も、子供達も手伝い、昔の日本商会の仲間も聞き伝えて寄り集うようになり、この慣れない仕事もなんとか生計に役立った。

昭和二六年九月、インドネシアの農林省の招請を受け、後に建設及び運輸大臣となったH・ラオ氏との共同作業による農業機械の現地生産計画の要件にて、引揚後四年ぶりにて、インドネシアへ渡航した。正式独立後のインドネシアは、ゴムを始め、物産などの輸出が好調で意気軒昂の極みにあったが、政治的にスカルノ政権は、幾多の政策変更を重ね、経済、財政はまだ弱体であった。一ケ年の在留期間中、行方不明者の消息をひまあるごとに尋ね歩き多数、判明した。農機具の製造計画は、現地での調査、企画を終り、残るは日本政府との接衡だけというところまできたので、私は帰国することになった。日本側は、理解深く、実現一歩手前までに進んだところ、今度は逆に、インドネシア側にて、共産党、社会党がナショナリズムを理由にして反対に回り、外資導入、外国技術の警介と、徒らに理論を振り回しての現実離れした政策に走り、結局、一九六六年、スカルノ引退まで、外資に対して自由に門戸を開くことはなかった。この為、日・イを始めとして、インドネシアの対外経済協力は進展せず、これが、スカル

ノ政権の致命傷となった。

一九五一年以後、例年、一ケ年あるいは半ケ年インドネシアに帯在し、種々の経済技術協力 の手助けや, 戦争賠償の促進, 及び現地の零細農民の現金収入の方法としての養蚕の普及事業 などを手がけた。特に、この養蚕に関しては、一九五二年に片倉の小山氏と共にバンドンのチ サルワにて,桑苗四五十本を日本より持参し,現地在留の内藤知茂氏の援助を得て,指導セン ターを作り,試育に成功し,日本産に劣らない好成績を得た。これが,戦後のインドネシアに於 ける養蚕の発祥となった。気候風土の関係と,環境の差異などにより振興,発展は遅々たるも のがあるが,民間協力として,戦後,現在に至るまで,一貫して,この普及に努めている。内藤 氏は、独立戦の英雄、コサシ少佐や、マフダル大尉と共にインドネシア各地に宣伝、指導に走 り回り、独立戦争と、養蚕指導とに私欲を投げうって献身し、晩年は病を得て、ガルーの養蚕 道場にて一生を閉じられた。一九六一年には養蚕の調査のため,復員省よりマフダル,アクブ の両氏が派遣され、日本にて三ケ月各地を回って研修した。河波有一氏が私に協力して世話を した。翌,六二年には,アクブ氏の子息,サヌシ君,コサシ氏の息女カルティニさ んが来日 し,復員大臣が直接に,私に留学の面倒を見るよう依頼された。私は,大津,坂本の万世協 会,松井淨蓮氏に相談したところ,松井氏は心よく援助,協力を約し,農民道場に預ってもら うことになった。サヌシ君は七ケ年留学し、京都工芸繊維大学を優秀なる成績で卒業し、現在 はインドネシアの農林省に於ける唯一の養蚕専門家として,養蚕局の局長としての職にあり, 同国の養蚕事業の先頭に立って活躍していることは喜ばしい限りである。一九七三年には、ブ ディマン、カンダル両青年を群馬県太田市の深沢長平氏に依頼し、寄宿研修をした。同夫人を 先生として二人は半ケ年の間、養蚕のイロハを教わり、帰国前には、真綿、つむぎ糸の製造を 桐生や、結城で習得した。両君は、前記コサシ氏のおいに当る真面目な青年であり、帰国後、 ブディマン君は、農林省より要望され、スラウェシのソペンにて養蚕指導員として二ケ年間振 興に協力した。一九七三年十二月より、翌七四年三月までの三ケ月間、深沢長平夫妻、島村蚕 種の田島、町田両技師の指導にて、養蚕講習会をスカブミのアクブ氏桑園にて行なった。イン ドネシアの各地よりの講習者を集めて民間としては空前のこの講習会は好評で、以後、深沢夫 人清子さんの名を取って、深沢清子式養蚕法として、インドネシア各地に名を止める ことに なった。

その後、バンドンより五十キロのガルーに於いて、旧友内藤氏の意志につぐべく、約一町歩の養蚕センターを設営し、ブディマン君を責任者として指導に当らせている。ここでは桑木の改良を初めとして、生産された繭は生糸、絹織物の他、真綿、つむぎ糸などに加工し、各地の人々に研修せしめている。将来はインドネシア各地にて、品質の秀れたシルクが生産され、世界の市場にまで進出することが希望である。

一九五八年より、ようやく賠償も実施されるに至ったが、当時の政治家によって、政商との

間の闇取引の格好の手段とされ、約五億米ドルも消費されたにもかかわらず、今日に至るまで 効果的なものはなかった。私は,新生インドネシアの民族のため,戦事中,共に日本軍と日本 人の為、苦役を共にした人々のためになるべき賠償が、かくの如く乱費されるのを見て、暗た んたる気持であった。幾度も様々な人々から、これらの商売のためのおさそいを受けたり、イ ンドネシアの知人からも仲介、その他橋渡しを頼れたが、熱を入れて手助けをすべきプロジェ クトは少なかった。わずかにボゴール郊外、チアウイの絹織物工場のプロジェクトは、当時の 復員大臣の依頼もあり最初から手がけてみたが、スカルノ大統領の指示により、日本の最新式 の機械をということに途中から計画が変り、危惧した如く、これも現地に於いて無用の長物と 化した。これらの賠償プロジェクトに共通して現れたことは、日・イ相方とも、本当に国民の ためとなるべきは何かという, 基本的な問題を, 全く考慮に入れることはなく, ひたすらに, 莫大な金額に対して、私利私欲のみが先行したということである。何十万人と知れず、日本軍 のために強制され、労務者という名の下で、南方各地に送り込まれ、ビルマや、遠くはガダル カナルで骨を埋めることになったインドネシアの人々に思いを至す者は皆無であった。日本で は、この賠償のリベートに関して、常に黒いうわさが飛び交い、スカルノ政権の腐敗も又、こ の賠償によって始まった。私は、これらの一般に知られない実状を実際に見聞きする立場に居 て、自分の愛してやまない土地を心ない者達に土足で汚がされる思いがした。

このころ私は、これらの雑音からのがれる意味からも、賠償の良き一面ともいえる、留学生 の世話を始めた。私の家に彼等を紹き、自由に出入りをさせ、親代りになんでも相談できるよ うに心を配っていた。日曜ともなると、大勢の学生が私の所を訪問し、インドネシア語で自由 におしゃべりをし、国の料理を台所で勝手に作りだす者もいたりした。又、留学生以外に、す でに、インドネシアに於いて相当な地位を占めている専門家の研修も始まった。あらゆる分野 (経済, 教育, 医学, 看護, 農水産, 交通, 通信, 鉱工業等々) より政府派遣の人々が三カ月か ら六カ月の期間で、次々と来日し、日本政府の計画通りに、日本国中を視察、あるいは研修に 歩き回った。私は、日本政府の依頼により、それらの人々の世話役として北海道より 九州 ま で、いろいろな違った世界を見て歩くことができた。私自身も大いに研究、勉強ができて、ま ことに有意義な数年間を送ることができた。又,来日するインドネシアの,若いながらも各分 野の要職を占める専門家の人々は、皆極めて優秀であり、独立後、わずかの間にかくも多くの 人材を生み出しつつある国に対して、目を見はる思いがした。これらの人達と交歓、親しくし ている間に、インドネシアの産業発展の第一歩として、日本式の中小企業の育成を企ることが 大事であると私は思った。これは彼等、将来ある青年たちとひごろ話し合って得た結論でもあ った。未だ、基礎的な産業が満足に育っていない国に於いて、突然、先進国の省力的、全自動 的機械プラントを持ちこむより,家内工業に毛が生えた程度の小規模の工場をいくつも作り, 徐々に工業化を進めることが最も適当しているとの信念が生れたからであった。こういう考え

があったので、一九六十年に、インドネシア協会として、インドネシア中小企業基礎調査団を結成し、団長に元外相の谷正之氏を推し、二ケ月に渡り都市、農村を問わず、各地を回り、いろいろな調査を行なった。しかし、日本政府は、賠償以外の経済援助には、はなはだ消極的で、又、スカルノ政権は外資導入に対しては警介的であったので、直接に陽の目を見たものはなかったが、将来、有望な産業として、約百種ほどの中小企業プロジェクトの参考資料をインドネシア政府に手渡すことができた。その後、主に中国系の人々によって、この資料は活用されることが多く、中国人独得の勤勉さによって、少しづつ実現に移され、現在、インドネシアの産業をささえる重要なる部分にまで発展している企業も多く見られるような成果を残した。

# 現在の事業

成人した息子三人の協力により、日本商会を改名した、亜佐弗株式会社を経営し、主に農業 機械を東南アジア全域に販売している。特にコンパクトな精米一貫装置は、昭和初期より日本 商会にて初めて南洋に紹介して以来五十年近く、改良と研究を重ね、日本内地でも協力工場の 援助を受けて、今では、それぞれの国の農林省より、歩留り多い精米機として、熱帯米向きの 最適合機械として高い評価を受けている。私は商売に関しては、適当なるアドバイスをするに とどめ、もはや、一線にて売り込みをするなどのことは遠慮しているが、一九七十年の見本市 巡航船さくら丸には、実演のために乗り込み、インドネシア、マレーシア、シンガポール、タ イ、フィリッピン、台湾と巡回し、実演、紹介に務めた。その他、東南アジア各地にての、実 演, 見本市などには時間の許す限り参加し, 私自身としても, 未だ見ぬ土地に胸おどる気持に て、新しき友人をその地で作ることなどに今なお熱を入れ、これらの人々と将来の発展のため の議論をしたり、共に計画を練ったりしている。会社は、将来の日本商会の主義を徹底し営利 主義でないものとし、民間人としての、東南アジア諸国に対する経済協力の一助になるべき仕 事を主とする。これらの国々は長年欧米各国の植民地下にあり、独立後ナショナリズムに燃え ているとはいっても, 今なお, 依頼心は強く, 熱帯民族特有の大らかさ故, 北方民族の如き厳 しさがない。よって、発展は遅々たるものがあるが、日本人としては、将来共、これらの民族 との共存共栄を企り,努力を重ねることが任務であると思っている。

私は、日露戦争の直後より今日まで、ひたすらに南洋に対して興味を持ち続け、日本が未だ 東洋の一小国であった時代から、今や経済、工業力に於いて欧州をしのぎ、米国に追いつかん とする貿易国にまで成長したことを、その成長の第一歩を、私の年代が担っていたことを思 い、運命的なものを常に感じている。私が中学校を出る頃には、それまでのパイオニアとして の南洋行商人の時代が終り、トコ・ジャパンに移行する時代であった。それは、日本の南洋関 与が個人の移動販売という根無し草的な時期を終えて、より発展的に都市なり、町村なりに定 着し、規模を大きくし、現地に日本の影響を強め始めたことを意味する。私が初めてジャワに

渡航した大正六年は、第一次大戦の最中で、この第一次大戦が、トコ・ジャパンを定着させ、 成長させた最大の原因であったと思える。それまでは、手先の器用さを買われた技術者か、せ いぜい日本の特産品とか、売薬類が主たる対象であったものが、欧州製品が途絶えた ことに よって、止むを得ず南洋の人々は粗悪の見本のように嫌っていた日本品を使わざる を 得 なく なったのだ。特に、白人や、中国人までもが、嫌々ながらも日本より輸入された日常雑貨品を 買う姿は、それまでは決してなかったものである。日本内地に於いても、輸出といえば,生糸, 絹織物を中心に, 現在の発展途上国の如く, 第一次産品ばかりであったものが, 第二次加工品 の輸出が急激に伸びて、いわゆる商社的な動きをする会社がにわかに成長したのも 同 時期で あった。この時に私はジャワにいて、飛ぶように売れる日本品の仕入れ、販売に従事してい た。私のいた潮谷商会は、トコ・ジャパンの小売ではなく、一種の商社的性格を持った問屋の ようなものであったので、取り扱う多種類の商品を通して、多数のトコ・ジャパンの主人と接 する機会も多かった。又、ジャワ、スマトラ、ボルネオ、セレベス、マレー半島、シンガポー ルと、出張も多かったので、自然に古くから南洋に住みついている日本人との付き合いも出来 て,明治の始めよりの先人の足跡を,直接,間接に知ることができたのである。南洋各地で, 第一次大戦を機に、トコ・ジャパンはいっせいに活動の場を拡げ、日本人は、売りさばく日本 品の数がふえるにつれて, 肩身の広い思いを深めていったものである。第一次大戦が終り, 世 界的な不景気になると、大世帯で進出してきた新生の商社連中は、みな撤退していったが、一 度、定着したトコ・ジャパンは、それが等しく筆舌につくし難い苦役の結晶であったので、み なが歯をくいしばって耐えたのである。昔の行商できたえぬかれた各地の主人たちは、意気あ がらぬ私のような青年を温かい言葉で励まして下さり、再び立ちあがる勇気を与えてくれたも のだ。又、現地に於いても、それまで馬鹿にしていた日本品が案外に品質の良いものもあると いった評判で、終戦後に再び入って来た欧州品との競争が始まり、トコ・ジャパンは、切りつ めた薄利と,夜おそくまでの営業や,単一価格や,安売りデー,チェーンストア化による仕入 原価の合理化などで対抗した。各地のトコ・ジャパンはみなが仲良く, 決してお互い の足を 引っ張り合うことはなく、明治の日本人としてのナショナリズムがここでも役立っていた。ま た、特筆すべきは、現地の住民の日本人に対する格別の好意で、これがなんといっても大きな 味方であった。白人国であるロシアを負かしたということが、植民地下にあった南方各地の人 人にどんなにか勇気を与えたか分らないし、特にインドネシアに於いては、この親日的態度は 終始変らず、今日にまで至っている。日本人の南洋進出は、先ず日露戦争の勝利によって足が かりを得、第一次大戦によって、その基礎を大きく固めたといって過言でない。

私はその後,満州事変がなければ,遠くアフリカに渡って,かの地にトコ・ジャパンを開設していたことであろうが,それも思いがけないことで途絶してしまった。私の人生は,日本という国が経て来た歴史的な大きな曲り方で必ず振り子のように一転し,何度でも裸でほうり出

されることになったが、最後にやってきたのは、第二次大戦開戦の日の財産没収と、終戦時**の** 消滅であった。

戦後、インドネシアは独立し、昔、若き独立運動の志士であった青年達が国政を担当するようになった。必ずしもインドネシアは彼等が夢見ていたような発展をとげたとはいい難いが、彼等と共に夜を徹して語った独立は達成され、いつもかくし持っていた紅白旗は堂々と各家にひるがえり、インドネシアラヤの国歌も毎夜ラジオやテレビから流れ出る時代がやってきたのだ。私は、一生を通して、六十年以上もの間、この国と関りあって生きてきた毎日をいつも貴重なものと思い、子供達も、自然に、インドネシアとの関係の仕事に従事していることを思うと、つくづく不思議なめぐり合わせのような気がする。私の商業人としての規範となった、昭和六年創立の日本商会の定款は次のように目的を規定している。

「当会社は総て寄託を受けたる財物を利用厚生し,事業は敬虔の念を以って担当し,真の治生産業に奉仕せんとする者相倚り,相互扶助の協同的生活を行じ,人類社会共存共栄の実を挙げ,以って平和的文化社会の将来に資せんことを目的とす」

どこまで目的を全うしてきたか、大いに反省もあるけれど、これからの残りの人生も、又、 微力ながら日本と東南アジア、アフリカとの関係に全力を傾むけたいと思う。日本商会は、こ の気持より、昭和四十年に社名を、亜佐弗株式会社(ASAF CORPORATION LTD.)と改 称し、アジア、アフリカの途上国の人々との交易と繁栄を念願としている。

(一九七七年九月十五日)